

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02012

研究課題名(和文)メディア文化における「孤独」の系譜

研究課題名(英文)Genealogy of Solitudes in Media Cultures

研究代表者

長谷 正人 (Hase, Masato)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：40208476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「孤独」という独自の観点からメディア文化の歴史を再考することである。従来のメディア研究では、写真、テレビ、(携帯)電話などが人々の間に「つながり」を作り出し、社会的集団を形成してきたことが重視されてきた。これに対して本研究は、メディア文化の根底的な部分に「孤独」な経験と意識が生じていたことに着目し、従来のメディア理解を転倒させることを試みた。結果として、20世紀以降の写真、映画、テレビ、電話などが、それぞれの土地や社会に固有のヴァナキュラーな文化と交錯しつつ、現在までに孤独なメディア経験を醸成してきたことを明らかにし、その成果を数々の論文や書籍によって発表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、しばしば「つながりの過剰」とも形容されるような現代のメディア社会のなかにおける人びとの「孤独」な経験や意識のありようを歴史的に明らかにしたことである。このことは、つながりや集団の形成をもっぱら重視してきた従来の学術研究では見過ごされてきた側面であり、また、メディア文化が歴史的に「パーソナル化」と呼ぶべき事態を社会のうちに引き起こしてきたことを示してもいる。さらには、以上のような考察を進めていくなかで社会学と美学・芸術学の二つの分野の研究者が融合し、それぞれのアプローチを相補的に深化させることができた点にも意義があった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to historically reconsider media culture from the unique perspective of "solitude". Previous studies have discussed the ways in which photography, television, and (mobile) phones have created "connections" among people and formed specific social groups. However, this study attempted to upset these conventional understandings by focusing on the way that a sense and experience of solitude emerged as an underlying part of media culture. As a result, we have clarified that photography, film, television, and the telephone, especially since the 20th century, have fostered solitary media experiences up to the present while intersecting with the vernacular culture unique to each land and society, and have been able to publish our findings in a number of papers and books.

研究分野：社会学

キーワード：メディア文化 映像文化 孤独 パーソナル化 写真 映画

1. 研究開始当初の背景

従来のメディア史やメディア研究においては、メディアがどのように社会的な「つながり」をもたらしたかを重視した研究が行われてきた。19世紀から20世紀にかけて社会に浸透したさまざまなメディアのうち、新聞であれば「公衆」や「国民」という公的世界・政治的世界での「つながり」を、映画であれば「大衆」や「消費者」といった都市的世界での「つながり」をもたらしたことが注目されてきた。それ以降に普及したラジオやテレビといったメディアもまた、私的空間における人びとの「視聴者」としての「つながり」を形成したことが注目されてきた。そうしたメディアによる社会的な「つながり」の歴史的延長として、パーソナル・コンピュータやスマートフォンによる「つながり過剰」の社会が問題とされるようになったのだ。

しかしながら、こうしたメディア文化における「つながり」や集団の形成は、その根底においては、人びとの「孤独」な意識や実践を基盤としていることにも注目すべきである。現在流行している、インスタグラムなどのSNS上に自身の写真を公開するための撮影行為(自撮り)は、撮影者が「他者」からの承認を得るために行う自己疎外的な行為として批判されることが少なくない。しかしながら、それらの写真を撮影する瞬間に、多くのひとはスマートフォンに向けて独りでポーズを取っているのも確かだ。つまり、「つながり」を求めて自己を提示する行為の根底には、きわめて孤独な経験も存在しているのである。自撮りやつぶやきといった人びとの行動を駆り立てるのが「つながり」を求める欲求であればあるほどに、社会のうちにはますます「孤独」な行為や意識が広まっているとも言えるだろう。このことについて従来のメディア研究は十分な考察を展開してこなかったのではないかと、これが本研究の開始当初の背景となった問いである。

2. 研究の目的

現代社会に指摘される「つながりの過剰」とは、メディア経験が本来的に「孤独」なものであった事実の裏返しにほかならず、このことを歴史的に明らかにすることは、メディア文化を根底から再考することでもある。このようにして従来のメディア理解とは異なり、「孤独」な経験や意識がいかにして歴史的に醸成されてきたのかを明らかにし、それによってメディア文化についての従来の理解を刷新することが本研究の目的である。

これまでのメディア研究は実際に、テレビの視聴者の行動への影響を中心化したオーディエンス研究であれ、社会階級やジェンダー間による受容と消費の違いに着目したカルチュラル・スタディーズであれ、メディア文化が集団や接続をいかに形成するのかを強調するものがほとんどであった。今世紀に入ってコンピュータやスマートフォンなどの新しいメディアを対象とする場合にも、そうした方向性に大きな変化は生じていない。肯定的であれ否定的であれ、つながりや集団といった観点からコミュニケーションの問題としてメディア文化を考察する議論が、現在も趨勢を占めているのである。

その結果として、つながりを過剰なまでに喧伝する社会の裏側に貼り付いていたであろう、人々の孤独な意識や経験はこれまで軽視されることになった。もちろんスマートフォンやコンピュータに常時接続されている以上、そうした現在の人々の実践から直接的に孤独な意識や経験を明るみに出すことは難しいのかもしれない。そこで必要となるのは、これまでのメディア文化のうちで孤独な意識や経験がいかにして形成されてきたのかについて、歴史的な調査や理論的な考察によって明らかにすることである。そのために本研究は、孤独なメディア経験を現在に特有のものとしてではなく、写真や映画、テレビやラジオなどの歴史のうちから浮かび上がらせることを目的とした。それによって、社会的な集団形成を常識的な理解としてきた従来のメディア研究にも一定のインパクトをもたらすことができると考えた。

3. 研究の方法

以上のような目的のために、本研究ではまず、社会学と美学を専門とする合計9名による研究グループを組織した。メディア文化に生じた孤独な経験を明らかにするためには、それぞれの技術や文化が社会のうちで占める社会的な位置と、メディアと対峙する人々の身体的・美学的な側面の双方の分析と考察を進める必要があるためである。そこで双方の立場を織り交ぜたメンバーの各4名が「メディア史班」と「現代メディア文化班」に分かれ、研究代表者の長谷正人が全体を統括するかたちで作業は進められた。各班のメンバーと当初に予定されていた分析対象は以下のとおりである。

全体の統括：研究代表者の長谷は、映画やテレビといった映像文化を中心に「孤独」なメディア経験として再考する作業を進める。とりわけ1960~70年代以降の映画作品や大衆文化のうちに「パーソナル化」と呼ぶべき転換が生じていたことを明らかにし、この概念を本研究グループ全体にとっての指針として精緻化していくこととした。

メディア史班：写真論を専門とする前川修と菊池哲彦、テレビ文化と映画論を専門とする加藤

裕治と川崎佳哉の4名が担当した。分析の対象としては、写真に関する古典的な理論や19世紀以来の写実実践、そして、テレビやラジオと交錯することになった20世紀中頃の活字メディアや映画作品などの事例が選ばれた。

現代メディア文化班：同様に社会学と美学の立場から、映像文化を専門とする大久保遼と角田隆一、松谷容作と増田展大が担当した。分析対象として設定されたのは、写真や電話などのメディア経験を取り込んだ現代のスマートフォンやスクリーン文化であり、それによって生じたコミュニケーションや身体的ないし感性的な経験の変容などである。

以上の体制によって年度毎に4~5回の定期的な全体会合を開催し、まずは本研究に関連する文献読解から開始し、その後は各自の研究報告を進めた。当初、最終年度にシンポジウムの開催を予定していたが、これはコロナ禍と重なり断念せざるをえなかった。ただし以下に記すように、研究会はオンラインに移行したことで綿密な議論が可能となり、その成果は各メンバーによる論文や書籍、学会発表などで公開することができた。また、本研究に関心を寄せる出版社の編集者と意見交換も進めており、今後は出版物による成果発表も予定している。

4. 研究成果

以下では、全員参加で進めた研究会の成果、続けて個別に発表した成果をまとめていく。

(1) 研究会による成果

まずは、初年度にキックオフのための会合を開催し(2018/4/28:以下、括弧内に開催日を記す) 続けて本研究に関連する文献について担当者を決め、全員でそれらを精緻に読解する作業を進めた。具体的には、自撮りによって生じる身振りや意識の変容について論じたP・フロッシュの論文(6/30) メディア技術にコントロールされた現代社会を批判的に考察したJ・クレーリー(9/1) ドローンという最新の映像技術を考察したR・スタール(12/1) およびG・シャムユーらの著作(2019/3/16)であり、それぞれが異なるメディア体験を論じつつも「孤独」な意識や経験を基盤としていることを確認した。

二年目には代表者をはじめとする研究報告も開始し、全体の方向性を確認する作業を続けた(2019/07/20、9/28) と同時に文献読解も継続し、ここでは写真研究者のG・バッチェンによるヴァナキュラー写真論を取り上げた(2020/1/11)。この文献が選ばれたのは、社会学とは異なり美学=芸術学の想定するメディア文化は本来的に個人で単独に進められると想定されていることが多いため、それらが生じる土壌として各土地に固有の文化や実践を指す「ヴァナキュラー」概念を設定することが有用であると考えたためである。

最終年度には、文献として蓮實重彦による最近の映画論を取り上げ(5/30、7/11)、後期ゴダールやストロープ=ユイレなど、ハリウッド以外の映画制作にも撮影や編集作業などに孤独な実践が要請されたこと、それらを現在の視聴覚文化へと展開する可能性を確認した。そのうえで年度途中からは、各メンバーの論考執筆に向けた構想を報告する研究会を連続的に実施した(2020/9/5、9/19)。そのなかで報告された内容は、20世紀初頭の写真家であるJ=H・ラルティエグや興行師のE・レイノーの映像実践にはじまり、現在の視聴覚文化に生じるノスタルジー志向やYouTuberによる自撮り、プリクラやインスタグラムを前にした若者たちの「エモい」といった反応、さらには微小重力下で宇宙飛行士に生じる身体感覚の変化などの多岐にわたる事例となったが、これらを書籍出版に向けて統合するための方向性を確認することができた。

(2) 個別発表による成果

研究代表者：孤独なメディア経験としての「パーソナル化」が推し進められるようになった歴史上の転換点は、おおよそ1960年代から70年代に確認することができる。この時期にはアポロ11号の飛行士が大地から切り離されて地球を見つめるという孤独な経験が提示され、それらと同調するように映画作品のうちで人間の孤独な姿が強調されるようになると、そのことがまた、アメリカにおける黎明期のコンピュータ・カルチャーへと多大な影響を及ぼすことにもなった。研究代表者は、このようなパーソナル化についての調査と考察を論文や研究会などで報告し、孤独という観点からメディア文化を考察するための歴史的かつ理論的な視座をメンバー間で共有する作業を進めた。また、ヴァルター・ベンヤミンの複製技術論の再読を進め、『アナと雪の女王』(2013)や東日本大震災の津波を間近で捉えた携帯動画を分析した論文を発表した。後者の論文では、これらのヴァナキュラーな映像に人々の主観的な欲望が現れるようになったこと、とはいえず、そこで従来視覚文化論が十分に取り扱えなかった聴覚的な側面が重要な役割を果たしていることなどを指摘した。

メディア史班：メンバーのうち前川修は、W・ベンヤミンやR・バルト、P・ブルデューなどによる古典的な写真論を再考する作業を進め、その成果を二冊の単著『イメージを逆撫でする』と『イメージのヴァナキュラー』(2019、2020、ともに東京大学出版会)で発表した。後者の著作のうちでは、社会学や美学、建築論や人類学などで横断的に論じられてきたヴァナキュラー概念の整理と考察を進めた。ほかに論集『インスタグラムと現代視覚文化論』(2018、BNN新

社)に寄稿した論考では、データ・アナリティクスを駆使して写真を論じたレフ・マノヴィッチの議論を批判的に検証すべく、デジタル写真を独自のフロー体験や情動的な経験として再考した(同書には増田も寄稿し、先のフロッシュによる自撮り論を展開した)。次に菊池哲彦は、当初予定していた写真実践だけでなく、ドローンに関連する視覚文化論の調査や読解を進めた。軍事技術として登場したドローンが注目に値するのは、孤独な経験を引き起こす「兵器化されたまなざし」を映画やゲームなどの視覚文化に取り込んだ象徴的な事例とみなしうるからである。菊池はそのことを指摘した上述のR・スタールによる英語著作の書評文を公開し、ほかにも最近の事例として、孤食や飯テロについて考察した論考を『ふれる社会学』(2019、北樹出版)に寄稿した。加藤裕治は、当初は活字メディアに対する読書経験を分析対象として予定していたが、そこから移行してテレビ番組の分析やYouTuberについての考察を研究会などで報告した。川崎佳哉は、映画監督のオーソン・ウェルズが手がけた映画作品やラジオドラマを「一人称」という観点から分析し、その成果を表象文化論学会や映像学会での口頭発表および前者の学会誌に査読付論文として発表した。

現代メディア文化班：角田隆一は「パーソナルな写真文化」という観点から若者たちによる写真実践、特にプリクラからインスタグラムへの移行に生じたメディア経験の比較検討を進めた。写真による「盛り」や「映え」といった現象を分析することで、社会学者のA・ギデンズが自己の反省や検証が不断に求められる近代社会の原理として提出した「再帰的自己」という概念を更新する議論を論考にまとめた。大久保遼は現代の映像文化をスクリーンという観点から再考し、映画以前の視覚文化と結びつける系譜学的な調査を進めた。その成果は日本社会学会の学会誌に掲載された査読付論文のほか、自身が編著者のひとりを務めた論集『スクリーン・スタディーズ』(2019、東京大学出版会)にまとめられた。後者のうちでは、現代のメディア技術を駆使するRhizomatiksによる舞台パフォーマンスの演出を、メディア考古学的に分析した論考を掲載した。また同書には、松谷容作が戦前に国内で流通した家庭用映像機器「パテベビー」による撮影や消費についての調査と考察を展開し、増田展大が生命組織を応用した最近のバイオアートにつながる歴史上の科学的な映像実践についての論考を発表した。ほかにも松谷は国際学会で上記の論考のもとになる口頭発表を実施したほか、宇宙飛行士による孤独な経験に生じる感性的な変化についての研究も発表した。増田は自撮りなどを中心に、スマートフォンに取り込まれた写真について歴史的に考察した論考を『基礎ゼミ メディア・スタディーズ』(世界思想社、2020)に寄稿し、また編著者の一人として『クリティカル・ワード メディア論』(フィルムアート社、2021)で「画像」や「複製」等の項目を執筆した。なお同書には、松谷と前川がそれぞれ「軍事」「ヴァナキュラー」といった項目を寄稿してもいる。

以上のように、本研究の成果は、20世紀中頃の映像文化のうちに指摘された「孤独」ないし「パーソナル化」といった論点を、各メンバーが歴史的ないし現代的なメディア文化の事例のうちで展開するようなかたちで発表されてきた。そのうち「メディア史班」の研究成果は、20世紀の写真や映画、テレビに始まり、現代のドローンやデジタル写真へと「パーソナル化」が推し進められてきたことを歴史的かつ実証的に示すものであったと言える。その一方で「現代メディア文化班」が扱ったインスタグラムやスクリーン映像、スマートフォンについては、そのうちに生じる「孤独」な経験へと十分には迫りきれない部分もあったかもしれない。それでも以上のような相補的なアプローチによって、従来の写真、映画、テレビといった個別のメディアだけでなく、スマートフォンや軍事技術、家庭用映像機器などの広範な事例を取り込んだ重層的な議論を展開することが可能となった。

冒頭で確認したように、集団やつながりの形成を引き起こすメディアの作用は従来、それらをマスメディアとみなすことで導き出された理解であったと言える。その一方で、本研究が考察してきた対象は、ほとんどが20世紀以降のヴァナキュラーな次元で展開してきたメディア文化である。後者のような事例に焦点を当てることで、その基底となる部分に人びとの孤独な経験や意識が生じていたことを歴史的に明らかにしたことが本研究最大の成果であり、これによって当初の目的を達成することができたと考えられる。今後は「自撮り」というテーマに焦点を絞り込み(このテーマで継続的に科研費を獲得できた)、本研究の成果を土台としてさらに発展させていくこととしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 長谷正人	4. 巻 75 (6)
2. 論文標題 津波映像と『アナ雪』 映像文化における音声化の諸問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 308 - 315
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷正人	4. 巻 49 (8)
2. 論文標題 土着と記号の狭間で 前川修『イメージのヴァナキュラー 写真論講義 実例編』を読んで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 UP	6. 最初と最後の頁 44 - 48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷正人	4. 巻 52 (10)
2. 論文標題 「幼年期」の映画、あるいは記号化する日常と「身体」 極私的大林宣彦論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ 総特集大林宣彦1939-2020	6. 最初と最後の頁 93 - 103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池哲彦	4. 巻 80号
2. 論文標題 書評: 『ヒッピー世代の先覚者たち : 対抗文化とアメリカの伝統』, 編著者 : 中山悟視, 出版社 : 小鳥遊書房, 出版年 : 2019年10月15日, 総ページ数 : 328頁	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 尚綱学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 51-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24511/00000502	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 33
2. 論文標題 メディアの物質性をめぐる試論 写真とデザインが交差するところ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『芸術工学研究』九州大学大学院芸術工学研究院	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/4113196	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 なし
2. 論文標題 人の動きを観ること、制御すること、撮ること -1980年代の子供とジャッキー・チェンの関係から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 KYOTO EXPERIMENT magazine	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川崎佳哉	4. 巻 14
2. 論文標題 「一人称単数」の語りという実験 : オーソン・ウェルズのラジオ・ドラマと『宇宙戦争』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表象	6. 最初と最後の頁 126-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷正人	4. 巻 第10号
2. 論文標題 自己、写真、ファッション アウラの凋落とファッション文化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Fashion Talks...	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池哲彦	4. 巻 78号
2. 論文標題 (書評) Through the Crosshairs : War, Visual Culture and the Weaponized Gaze : 著者 : Roger Stahl, 出版社 : Rutgers University Press, 出版年 : 2018, 総ページ数 : vii + 211 pp.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 尚綱学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 25-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24511/00000433	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菊池哲彦	4. 巻 第3432号
2. 論文標題 流行歌を支えたメディア環境:「流行歌を介して民衆と社会が繋がりをえた時代」を描き出す	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 5面
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田隆一	4. 巻 平成30年度助成研究等報告書
2. 論文標題 映像文化にみる「再帰的自己」の現代社会論的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 公益財団法人横浜学術教育振興財団	6. 最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前川修	4. 巻 16号
2. 論文標題 セルフイ論 - 顔、腕、情動のエコノミー -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美学芸術学論集(神戸大学文学部芸術学研究室)	6. 最初と最後の頁 5 - 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nobuhiro MASUDA	4. 巻 第31巻第1号
2. 論文標題 Chronophotography and Plasmatic Cinema	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学・芸術・文化（近畿大学文学部論集）	6. 最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 第3巻第2号
2. 論文標題 アニメーションの皺 身体造形の形態学的分析を通じて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 暨南大学外国語学院編：外語論叢	6. 最初と最後の頁 161-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 第19号
2. 論文標題 （書評）『科学者の網膜』から見えてきたもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 質的心理学研究(特集 身体を対象にした,あるいは,身体を介した/通した質的研究)	6. 最初と最後の頁 244-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増田展大	4. 巻 第3号
2. 論文標題 メディアの動物性、インターネット以降のロマン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Poi	6. 最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 第3巻第2号
2. 論文標題 ポストメディア状況以後の日本のアートの営み - - ポストインターネットとグローバルアートの視座で	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 暨南大学外国語学院編：外語論叢	6. 最初と最後の頁 153-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 第31巻第1号
2. 論文標題 Deleuze's Cinema and Lumiere Films	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学・芸術・文化 (近畿大学文学部論集)	6. 最初と最後の頁 47-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 第120巻12号
2. 論文標題 宇宙から地球をながめる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷正人	4. 巻 50巻12号
2. 論文標題 「社会実験」としての映画 『ハッピーアワー』について考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 268 - 275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷正人	4. 巻 第64輯
2. 論文標題 複製技術時代における思考の可能性 ベンヤミンの複製芸術論を読み直す	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 805 - 820
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保遼	4. 巻 8
2. 論文標題 スクリーン・プラクティスの再設計	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 エクリヲ	6. 最初と最後の頁 210-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保遼	4. 巻 69(2)
2. 論文標題 感覚の理論と社会の理論：日本社会学史における元良勇次郎	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 179-195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松谷容作	4. 巻 第35巻
2. 論文標題 嗅覚を軸としたインターフェイスとコミュニケーションについての調査研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 総合文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎佳哉	4. 巻 9
2. 論文標題 (書評) オーバー・ザ・シネマ 映画「超」討議	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 表象・メディア研究	6. 最初と最後の頁 89-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 長谷正人
2. 発表標題 原っぱの社会学は可能か？
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会テーマセッション(6) 文化社会学の感性論的転回 社会美学 (social aesthetics) の可能性と課題
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 マンガ史にたどるポストメディア的表現 ウィンザー・マッケイを中心に
3. 学会等名 第63回九州マンガ交流部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 分解と発酵をめぐるメディア論 メディア(生態学)の発酵のために
3. 学会等名 日本記号学会第40回大会シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 機械の目、コンピュータの目 自動化する映像についての試論
3. 学会等名 日本映像学会第46回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Just an image?
3. 学会等名 The Sixth International Conference on Transdisciplinary Imaging at the Intersections between Art, Science and Culture DARK EDEN (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Aesthetic Techniques Without Technology: Soichiro Mihara 's " [blanc] project "
3. 学会等名 The fourth international conference "Taboo - Transgression - Transcendence in Art & Science" (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大久保遼
2. 発表標題 オフ・スクリーンのメディア史の構築
3. 学会等名 マス・コミュニケーション学会 第37期第7回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 イリュージョンとモデリング 科学における生命付与(アニメーション)について
3. 学会等名 日本記号学会第39回大会「アニメ的人間 ホモ・アニマトゥス」(第3セッション「アニメーションはアニミズムか アニメ的人間の未来」)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 A Perspective about Human Experience and Sensibility in the Coming Space Life : Based on an Analyze of Research Results on the Body and Mind of the Astronauts
3. 学会等名 21st International Congress of Aesthetics
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大久保遼
2. 発表標題 弁士の身振り：連鎖劇、幻燈文化、弁論術との関連に注目して
3. 学会等名 声、動作、音楽：サイレント時代のフランスと日本における映画上映
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大久保遼
2. 発表標題 Reconsidering Screen Practice in Japan
3. 学会等名 Lecture and Workshop with Prof. THOMAS ELSAESSER (University of Amsterdam)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 自撮りと現実感覚について
3. 学会等名 公開研究会「インスタ映えの美学 溶解する「写真」と「現実」」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 増田展大
2. 発表標題 静止と運動、またはマンガと映像の接点をめぐって
3. 学会等名 ワークショップ「マンガの体験、メディアの体験」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 A Perspective about Human Existence in the Coming Space Life : Based on an Analyze of Survey on the Body and Mind of the Astronauts
3. 学会等名 ELLAK International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yosaku Matsutani
2. 発表標題 Becoming Static: Image Practice of Pathe Baby in Japan
3. 学会等名 Lecture and Workshop with Prof. THOMAS ELSAESSER (University of Amsterdam)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川崎佳哉
2. 発表標題 「一人称単数」の語りという実験：オーソン・ウェルズのラジオ・ドラマについて
3. 学会等名 表象文化論学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川崎佳哉
2. 発表標題 奥行きという「闇の奥」：『市民ケーン』のスクリーンをめぐって
3. 学会等名 日本映像学会テキスト分析研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 前川修	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 268
3. 書名 イメージのヴァナキュラー 写真論講義：実例編	

1. 著者名 前川修（第5章）、勝又公仁彦（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都芸術大学 東北芸術工科大学 出版局 藝術学舎	5. 総ページ数 328
3. 書名 写真1 写真概論（はじめて学ぶ芸術の教科書）	

1. 著者名 前川修（第3部9）、松谷容作（第3部17）、大久保遼（第1部5、第3部10）、増田展大（第1部1、7、第3部1、3）、門林岳史・増田展大（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 296
3. 書名 クリティカル・ワード メディア論：理論と歴史から「いま」が学べる	

1. 著者名 前川修（487-542頁）編集、（514-515頁）、（516-519頁）、松谷容作（520-523頁）、（532-533頁）、増田展大（490-493頁）、（496-497頁）、（504-505頁）、（528-531頁）、美学会（編集）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 735
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 大久保遼（第12章）、増田展大（第11章）、伊藤守（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 402
3. 書名 ポストメディア・セオリーズ メディア研究の新展開	

1. 著者名 増田展大（第3章）、石田佐恵子・岡井崇之（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 200
3. 書名 基礎ゼミ メディアスタディーズ	

1. 著者名 菊池哲彦（「第二章 飯テロにふれる」）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 ix + 152 pp.
3. 書名 ケイン樹里安・上原健太郎（編著）『ふれる社会学』	

1. 著者名 前川修	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 324
3. 書名 イメージを逆撫でする 写真論講義 理論編	

1. 著者名 松谷容作（第7章）、大久保遼（第10章）、増田展大（第16章）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 380
3. 書名 大久保遼、光岡寿郎共編『スクリーン・スタディーズーデジタル時代の映像 / メディア経験』	

1. 著者名 前川修（「デジタル写真の現在ー三つの層から考える」）、増田展大（「接続する写真ー記憶、自撮り、身振り」）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ビー・エヌ・エヌ新社	5. 総ページ数 376
3. 書名 久保田晃弘・きりとりめでの共訳・編『インスタグラムと現代視覚文化論ーレフ・マノヴィッチのカルチュラル・アナリティクスをめぐって』	

1. 著者名 増田展大、松谷容作共訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 352
3. 書名 ロージ・ブライドッティ『ポストヒューマン—新しい人文学に向けて』（門林岳史監訳、大貫菜穂、篠木涼、唄邦弘、福田安佐子共訳）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菊池 哲彦 (Kikuchi Akihiro) (10419252)	尚綱学院大学・総合人間科学系・准教授 (31311)	
研究分担者	前川 修 (Maekawa Osamu) (20300254)	近畿大学・文芸学部・教授 (34419)	
研究分担者	加藤 裕治 (Kato Yuji) (20633861)	静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授 (23804)	
研究分担者	川崎 佳哉 (Kawasaki Keiya) (50801792)	早稲田大学・文学学術院・その他(招聘研究員) (32689)	
研究分担者	松谷 容作 (Matsutani Yosaku) (60628478)	國學院大学・文学部・准教授 (32614)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大久保 遼 (Okubo Ryo) (60713279)	明治学院大学・社会学部・准教授 (32683)	
研究分担者	増田 展大 (Masuda Nobuhiro) (70726364)	九州大学・芸術工学研究院・講師 (17102)	
研究分担者	角田 隆一 (Tsunoda Ryuichi) (80631978)	横浜市立大学・国際教養学部（教養学系）・准教授 (22701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関